

平成 24(2012)年度 文部科学省 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 採択

豊橋研究支援課 田辺 勝巳

平成 24(2012)年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に東亜同文書院大学記念センターから申請した研究プロジェクトが採択されました。この事業は、大学の経営戦略や研究戦略に基づき、各大学が特色を活かした研究を実施するため、その研究基盤の形成を支援する事業であり、「研究拠点形成する研究」、「大学の特色を活かした研究」又は「地域に根ざした研究」の3つの申請区分の中から選定されるものです。記念センターは、「研究拠点を形成する研究」に申請し採択されました。プロジェクト名は「東亜同文書院を軸とした近代日中関係史の新たな構築」、研究代表者は馬場毅東亜同文書院大学記念センター長・現代中国学部教授で、事業実施期間は5年間(2012年度～2016年度)です。

本研究は、2006～2010 年度に実施された私立大学学術研究高度化推進事業(オープン・リサーチ・センター)「愛知大学東亜同文書院大学記念センターの情報公開と東亜同文書院をめぐる総合的研究の推進プロジェクト」の成果とそれに対する評価、要望をふまえ、より発展的に推進するものです。同事業では 20 世紀前半期に上海にあった「東亜同文書院」(以下書院)の存在を世に広く啓蒙した点で高く評価される一方、その存在が果たした歴史的役割に関する国内、国際的視点からの研究深化が次の課題とされました。本研究はそのような課題をふまえ、東亜同文書院の先駆的な教育システムや大調査旅行をふまえた中

国の地域研究、卒業生の中国での活躍など、総体としての東亜同文書院システムともいべき展開を軸として、それがどのように近代日中関係、さらには国際関係に役割を果たしたかを海外研究者の参加も得つつ実証研究するところに目的があります。それにより、従来書院が中国にあったがゆえに考慮されなかった新たな研究をも生み出し、書院を軸にした近代日中関係史を構築するところに意義があります。

本研究では研究代表者のもとに既存の愛知大学東亜同文書院大学記念センターの組織を利用し、基本的方向を協議する体制をとります。その下に各研究グループを設け、実施責任者とそれを支えるスタッフ(研究者、フェロー、学芸員、PD、事務スタッフ)で実行体制をつくります。あわせて、東亜同文書院史・愛知大学史に関する充実にもつとめ、愛知大学東亜同文書院大学記念センターを、博物館相当研究施設に発展させることを目指します。

なお、各研究グループは①近代日中関係の再検討、②「大旅行調査」からみる近代中国像、③書院の教育と中国研究システム、④書院から愛知大学への接合性、⑤書院および初期愛知大学卒業生の国際的就業、の5つからなり、学内者をベースとしつつ、国内では一橋大学、慶応義塾大学福沢諭吉研究センターのスタッフが、国外では上海交通大学校史編纂室、台湾中央研究院台湾史研究所、武漢大学、アメリカ・ジョージア州立大学、ミシガン大

学、フランス学士院、中国・地理研究所などのスタッフが参加協力する予定です。

1年目(2012年度)は、研究プロジェクトをスタートさせるための準備期間で、運営および予定確認を行いました。また、大学記念館(東亜同文書院大学記念センター)が新たな研究拠点になり、博物館相当研究施設に近づけるために改修工事を行いました。あわせて、耐火設備の収蔵史資料室を増設しました。

大学記念館の改修

大学記念館は、文化財保護法第56条の2第1項の規定により、文化財に登録(登録番号第23-0009号)されています。1908(明治41)年に旧陸軍第15師団司令部庁舎として建てられ、愛知大学創立(1946(昭和21)年11月15日)後は、大学本館として利用されました。1998(平成10)年に大学記念館となり、私立大学学術研究高度化推進事業(オープン・リサーチ・センター)に採択された2006、2007年に大改修をしました。今回は、それ以来の改修となります。

大学記念館の西・北面の外壁を全面的に改修し、老朽した板部材を取り外し、新板を羽

目かえ、外壁を職人の丁寧な技術で塗り直し、御殿のごとく綺麗な建物に復旧できることができました。



旧学長室(旧司令長室)

室内改修工事は、2階の旧学長室(旧司令長室)と隣室、1階3部屋を改装し、あわせて、特別展が催せる設備をそれぞれの部屋に整えました。

これにより、常設展のほか、特別展を随時開催することが可能となりました。東亜同文書院大学関係資料、山田良政・純三郎関係資料、愛知大学史関係資料ほか、毎年、企画展、特別展を開催するよう企画していく予定です。



本館北側面



収蔵史資料室の増設

今まで収蔵庫はありましたが、収蔵庫機能としての課題があったことから、「火災や地震などの自然災害、温度や湿度、汚染物質から貴重な資料を守る収蔵資料庫」とのコンセプトのもと、耐火設備の収蔵史資料室を増設しました。これにより、センターが保持する貴重な史資料を保存・活用する施設が完成しました。



●耐火性能について

愛知大学では紙媒体史資料が多くを占めるため、火災対策は最重要課題の1つです。火災対策にあたっては、耐火構造である既設室のコンクリート壁を利用し、開口部である窓際に耐火間仕切壁を構築しました。また、廊下側に関しましては同様に入口の1部を耐火壁によって閉鎖し、唯一の出入口には博物館・美術館等に使用される耐火性能に優れた特殊扉(収蔵庫扉)を設置しました。これによって、もし火災が起きた場合でも、焼失のリスクから守ることができ、貴重な史資料を熱による劣化から防ぐことができるようになりました。火災時でも、室内温度は80℃以下で30分間維持できる(30分後も大幅に温度があがることはない)など、史資料消失を免れたものの展示資料としての価値がなくなるといったことを逃れることができます。

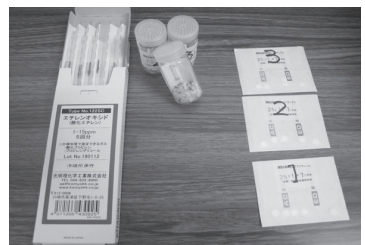


●環境性能について

貴重な史資料を後世に残すためには、突発的な自然災害のほか、日々の劣化にも対応する必要があります。特に湿度変動による被害はカビや史資料の老朽化を促進し、場合によっては修復が困難な状態になる場合もあります。本改修工事では、収蔵史資料室内の湿度を安定させるために、昨今博物館・美術館に多く採用されている(株)クマヒラの調湿パネル(キュアライト)を用いました。調湿パネルは文字どおり、壁材が湿気を吸ったり吐いたりし、室内湿度を安定させるパネルです。空調が停止した状態でも庫内の湿度が安定するため、東日本大震災においても空調機が停止した状態の中で、庫内湿度環境を安定させた実績があるそうです。

また、空気質の問題に関しても、コンクリート等から放出されるアンモニアや木材や有機物から放出される酢酸・ギ酸などの有機酸は史資料の退色や劣化を促進させますが、これら汚染物質に対しても収蔵庫独自の工法であるGV工法(ギャラリーボルト工法)を採用することによって、文化庁が推奨するアンモニア・有機酸の濃度推奨値を達成することができました。





燻蒸作業と、収蔵史資料室への搬出